3. 日本産肉研究会第4回学術集会

テーマ: 放牧畜産と国産粗飼料による産肉の展望

日時:3 月 28 日　於: 日本大学 生物資源科学部　主催: 日本産肉研究会（会長 山口高弘 東北大学教授）

1. わが国の放牧畜産基準認証制度（野口政志（社)日本草地畜産種子協会）

土・草・牛の資源循環型畜産としての放牧畜産を普及・推進する目的で放牧畜産基準を制定し、その認証制度を日本草地畜産種子協会が立ち上げ、その概要が解説された。その基準の中の放牧肥育牛生産基準、放牧牛肉生産基準をみると、放牧子牛を肥育し、「放牧肥育牛」として表示し出荷する場合、放牧肥育牛を屠畜、処理、カットした牛肉は「放牧牛肉」として表示し販売する場合にこの生産基準を適用するというもの。子牛は少なくとも 3 ヵ月以上放牧し、放牧肥育牛は肥育全期間で少なくとも DM 換算 30%以上の粗飼料を給与することと規定されており、放牧は成牛1頭当たりの面積(25a, 45a, 90a 以上)、放牧期間(100 日以上)、放牧時間(昼夜放牧が前提)を放牧地の植生に応じて基準を設けている。

3. 山形村短角牛の生産から販売まで（吉田和生 大地を守る会）

日本短角牛を粗飼料率 60%以上で肥育している「山形村短角牛」をさらに 2 シーズン放牧中心、飼料穀物はデントコーンサイレージの活用で国産 100%を達成した「That's 国産短角牛」に進化させた。目標肉質成績は A2 で、現在出荷牛の 90%以上が達成している。

4.「ふーどの牛肉」の生産から販売まで（江川 淳（株)パルミート）

生協の産直事業を通じたアンガス牛の生産・消費事例の紹介。資源循環型牛肉生産によるアンガス牛肉を牛1頭の各部分肉をローテーションで消費して行く事前登録制の産直販売で供給。年間 5,000 人の消費者に 7 軒の生産者から 155 頭のアンガス牛肉を供給し、「良質な赤身肉」、「飼料自給率」、「フードマイレージ」、「アニマルウェルフェア」等の意義への消費者の理解を深める取り組みとなっている。